

## 千年杉の村から

十二歳になったみれいには、いろいろ不思議なことがあったけれど、その中でもとりわけ二つの大きな謎があった。ひとつは、大きな大きな杉の木。下から見上げてみると、首が痛くなる。あわいピンク色の鳥が住み着いているらしく、時々飛んでいるのが見える。巣を見てみたいのだが、高すぎてのぼることもできない。大体、千年杉の下に立った人間が、小人のように見えるのだから、その大きさに、ただただびっくりする。



そして、もうひとつは飯豊山。村の山々のいちばん奥、樽口峠の向こうにドーンと座っていて、夏になってもなかなか雪が消えない。他の山に桜が咲き、木の葉が緑になっても、飯豊山の雪はまだ残ったまま。去年などは、頂上のあたりの雪が消えないまま、新しい雪が降った。

あの山の向こうにはいったい何があるんだべ？ひよつとしたら東京？

## 糸井山

イザベラバードが初めてそのけわしい山を見たのは、六月の終わりだった。会津若松から新潟へ向かう途中、大きな川にかかる浮橋を渡ったあと山道にさしかかっていた時だ。馬に乗っていたバードは

「なんでこんなに道が悪いのだろう。通訳のイトーが落馬したほどのドロドロとして悪い道。まあ、イトーが馬から落ちるのはしよっちゅうなのだけれど。それにしても、あの橋は立派だった」  
などと思いついて返していた。

阿賀野川の上流にあるこの橋は、川に十二隻の大きな船を浮かべ、その上に板を渡してあった。船は藤の木をつるで編んだ丈夫なロープで結んでいる。雨が降り川の水が増えて、水カサが上がっても、つるはピンと貼って船を流さない。逆に良い天気が続いて水が低くなっても、船は自由に上下できる仕組み、うまいこと考えたついたものだど、バードしきりには感心していた。

バードを乗せた馬は、峠の頂上に差し掛かった。山道をおおう森が切れると見晴らしが広がり、バードの目は、遠くに雪を頂いた高い山が飛び込んできた。

「イトー、あの山見て？ビューティフル！」

「あー、あの白黒の山ですか、もちろん見えますよ」

「若いのに感動しないのね、あの山はなんという名前？」

イトーは、馬を引いてきた男に山の名前を聞いた。

「あれは、糸井山と呼ぶそうです。漢字で糸と書きますから、何か織物に関するものかもしれません」

「織物に関係ある？変ねえ、私の眼にはそんなふうには見えないけど」

この山の本当の名前は飯豊山。神様の名前からつけられたという説や、夏でも黒い山肌に白い雪が残っている姿を「はんに見立て「めしがゆたか」となずけら

れたという説など、いろいろな説がある。イトーがメモに残した「糸井山」という字は、聞き間違いだった。



この時、彼女の目に入ったのは北の飯豊山だけではなく、東の会津磐梯山、南の明神岳もあった。

「金色の夕陽の中に紫色に染まっている会津の巨峰の眺めは雄大であった」と、感動ぶりを書いている。

バードは、北海道を目指して福島、新潟、山形と三県を旅するが、飯豊山だけはずっとバードのあとをついてくることになる。つまり、いくつもの峠を越えながら巨大な飯豊連峰ぐるっとまわって北に向かっていく厳しいルートを選んだのだ。太平洋側の道を選べば、こんな苦労はしないのだが、昔のままの日本を見たい。まだ、西洋人が足を踏み入っていない場所に行ってみたい、という思いで、あえてこの難しい道を選んだのだった。